朝日新聞くらしの情報誌
朝日ウィル
10月13日号
1992 Vol.223
編集・発行／㈱北煌社
仙台市青葉区中央4－4－4－305 ☎022(266)017
協力／ASA（宮城県朝日新聞販売店連合会）

健康のページ

すこやかに

Dr.三好の診療日誌から インタビュー

三好 彰
三好耳鼻咽喉科クリニック院長　南京医学院客員教授
㊐仙台市泉区七北田字二本柳43 ☎022(374)3443

7.エイズ、それは現代社会への警鐘？

最近の厚生省の対応にも表れていますように、この日本でもエイズ感染の問題は避けて通れない課題になりつつあるようです。様々な解決策が講じられ、医学面でも多彩な研究が押し進められて来ています。

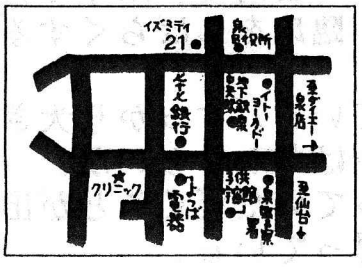
またそれと共に、エイズを単なる病気として捉えるばかりでなく、物質最優先主義の現代に対する批判と考える人も、何人か出てきました。ここでは、Dr.三好の友人の一人の、そんな考え方を紹介してもらいます。

▲小貫大輔さんの活動するファベーラにて

その友人は、ブラジル・サンパウロのファーベラ（貧民街）で、ボランティアとして環境保護や性教育問題に携わっている青年で、小貫大輔さんといいます。彼はつい最近、オランダのアムステルダムで開催された第8回国際エイズ会議に出席して、Dr.三好にこんな感想を送って来ました。

「最新の医学の状況をのぞき見ることができたのも有意義でしたが、たいがいは芳しくない報告ばかりで、治療方法やワクチンの開発はまだまだ先の話となりそうです。〝病原〟を攻撃することを〝治療〟とする従来の医学のイメージでは、ウィルスとの戦いに勝つことはきっと無理なんだと思います。〝治療〟ということに対する大きな発想の転換がない限り、医学によるアプローチにはいつまでも限界がつきまとうのだと思います。〝医学〟〝科学〟からのエイズへのアプローチが〝ウィルスとの戦い—戦争〟という色合いが強いのに対して、活動家、感染者からのアプローチには〝エイズと共に生きる〟という態度が強いのが印象的でした。エイズ・ウィルスに感染した人間にとって、ウィルスを体から駆逐することが無理であるなら、ウィルスとともに生きるすべを学ぶことが大切です。人間の社会についても同じです。現代の世の中にエイズが存在することは事実なのですから、エイズのある社会で人間が人間らしく幸せに生きていける道を切り開いていかなければいけません。…今回のエイズ会議では、科学の力によってすべてを解決しようとする態度への警鐘のように〝血液検査によっても検出されないウィルスが出現した可能性〟について示唆する報告がありました。…この会議が1994年に日本の土（横浜）を踏む頃までに、日本の社会はどこまで変貌を遂げているでしょう」。

彼が指摘するように、エイズは現代社会の隙間をついて広がってきた病気です。この隙間が、現在の人類の考え方ゆえにできてきたものだったなら…。エイズは、人間に反省を促す社会的現象なのでしょうか？



すこやかに

Dr.三好の診療日誌から

インタビュー

三好 彰

三好耳鼻咽喉科クリニック院長
南京医学院客員教授
㊟仙台市泉区七北田字二本柳43
(地下鉄泉中央駅前)
☎022(374)3443

8・砂時計

先月号のエイズの話題は反響が大きく、読者の関心の高さを物語っていました。そこで今回は知らないうちに、いやその危険性を指摘しておりながら、どうにもならない理由でエイズ感染に晒された血友病患者のことをお話ししましょう。

砂時計

HIV感染者として生きる

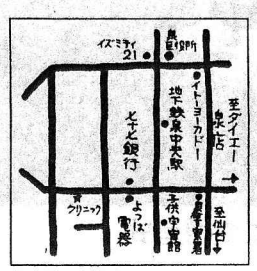
ご存じのように、血友病は血液成分の一部に異常があり、怪我などで体に傷がつくと出血が止まらない。恐ろしい病気です。このため血友病患者は外傷は当然として、ちょっとした打ち身でも内出血が起こり、寝たきりの生活を続けざるを得ない、そんな状態となります。その彼らを救う手段はただ一つ、血液成分の不足を補う血液製剤を投与することです。ですからこの血液製剤無しに血友病患者は、まともな日常生活を送ることはできません。いわば生命の綱でさえあるのです。その血液製剤にエイズウィルスHIVが混入していたとしたら…。その辺りの事情を、ミニコミ誌『砂時計』から拾ってみます。

「製薬会社の過失は、血友病の治療に使う血液製剤の原料が、ほとんどアメリカ由来の売血だったことにあります。原料の血漿は2000人から2万人の血液をプールして作られます。一人でもウィルスに感染していれば、そのプールしている原料はすべて感染してしまうという安全性に重大な欠陥を有していたのです。日本で売血はライシャワー事件を契機に、倫理性と衛生上の問題で追放されています。今回のエイズ問題では、アメリカではいち早く加熱処理して製造したのに、日本では科学的根拠もないまま安全キャンペーンをして、アメリカで危険だとして回収された血液製剤を日本で販売したのです。…先天性の病気の血友病で死ぬことは諦めがつくが、このエイズで死にたくない」。

もう一言、「頑張って生きるぞ！病気に負けないぞ！自分の心に言い聞かせた。このまま死んでしまったら、あまりに悲しい。エイズで死にたくない」、このHIV感染を受けた血友病患者の言葉です。

ここで引用しているミニコミ誌『砂時計』は、Dr.三好の友人で小さな出版社カタツムリ社を営む加藤哲夫さんが発行しています。そしてこの題名は、血友病患者の「今私たちは〝砂時計〟の砂のようにサラサラと命が落ちていく毎日を生きています」という感想から付けられているのです。

感染した事実は事実として、一刻も早く充実した救済対策を、と加藤さんたちは主張します。その通りだ、とお思いになりませんか？

◆

※11月から毎週、土・日曜日は午後5時まで診療いたします。